

離婚後の親子の絆を育む絵本から 得られる人間関係

— 単親家庭の子どもと両親家庭の子どもとの人間関係構築を考える —

矢野裕子

1. はじめに

絵本は、一般的には、教育的意味や文学的意味、子どもの文化として、さらには芸術性やメディアとしての価値を持って語られることが多い。1953年「岩波子どもの本」及び1956年の福音館書店の「こどものとも」の公刊は、現在の日本の絵本界の形成に大きく貢献したと言って過言ではない。第2次世界大戦後の日本に、世界の名作を数多く知らしめた。

子どもの文化の一つである絵本をとりあげてみたい。本稿では、とりわけ離婚家庭を題材に取り上げている絵本を対象とする。

保育園や幼稚園において、これらの絵本の読み聞かせの効果は、大きく二つ考えられる。第1に、離婚家庭に育つ子どもにとって、離れて暮らす親との人間関係構築に効果をもたらすと考えられる。第2に、クラス子どもたちにも、離婚家庭に育つ友だちの環境や気持ちが具体的にわかり、偏見を払拭していくことが考えられる。

そこで、本稿では、本の中で別居親と子どもがどのようにして人間関係を構築していくか、について焦点を当てて読み解いてみたい。それを読む園児たちは、単親家庭の友人たちの心を理解し、両親家庭の子どもと単身家庭の子どもとが人間関係を構築していく可能性があるか考察してみたい。

2. 絵本と子どもの心

松井（1978）は、「子どもは1冊の絵本で感じた心からの喜びや驚きを、周りの人と共感しながら想像力を広げ、満足感や充実感を味わっていく、その楽しさや満足感が深ければ不快だけ、その絵本の世界が子どものところに響き、人間的な成長の力となっていくのである。」と述べている。また、L・H・スミスは、『児童文学論』のなかで、「もしストーリーがその絵の上にあられていれば、その子の目は、それを発見するだろう」と述べている。

このように絵本は、子どもの心とその成長にとって重大な役割を果たす。佐々木（1993）が「〈絵本＝遊び〉説だけでは、絵本に「ついて何も語っていないに等しい」と指摘するように、絵本には、教育的意義や芸術的意義もある。

また、幼稚園教育要領では、言葉に対する感覚を養う点からまとめた「言葉」の領域で絵本について触れ、そのねらいとして「（3）日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする」と述べている。さらに、2000年4月1日から施行された新幼稚園教育要領においては、ねらい「（3）日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」と改正されている。絵本や物語を通して想像力を豊かにするという教育的意図と、さらに人間関係の形成の推進に役立てるように示唆している。

3. 先行研究

絵本の教育的意義から分析した研究には、例えば、高橋（1999）らの研究のように、自由保育において、絵本を読むという子どもの自発的な行為の中に、生活科学習の萌芽が育つような環境を整えることも大切であろうと指摘したものが挙げられる。

また、人間関係の構築の視座から分析した研究も多い。例えば、絵本を媒介とした母子相互作用の研究がある（菅井 2003、2004）。しかしながら、

母子関係は数多く描かれているのに対して、印象に残るような父親を描いたものはほとんど見当たらないことを指摘する佐々木（2001）は、「子どもの心を理解するための絵本データベース」を用い、内外の絵本の中から父親がどのように描かれているのかを分析し、父親と幼い子どもたちとの精神的な交流の可能性を考察している。その結果、佐々木（2001）は、生活が技術革新により近代化されても、その基本にある望ましい父親像の哲学は変わらないことや、わが国の絵本には、古き良き父親も新しいタイプの父親像もほとんど存在しないことを見出している。

絵本についての先行研究は数多いが、本稿では、とりわけ離婚後の家族や親子の人間関係をテーマに取り上げている絵本について考察してみたい。

4. 研究方法

（1）分析方法

① データベース「子どもの心を理解するための絵本」

鳴門教育大学のホームページに公開されたデータベースを用いる。鳴門教育大学図書館では、佐々木（2000）らにより大規模なデータベースが構築されている。このデータベース「子どもの心を理解するための絵本」は、基本的な書誌情報はもとより、6個の大主題（subject heading）とそれに連なる280の主題（subject）をもとに分析・入力されている。以下、データベースを確認しながら、佐々木（2001）の論文から詳細を以下に引用しておく。主題の件数は現在のデータベースを確認しながら、筆者が現在の件数に変更した。

データとして入力されている基本的な書誌項目としては、①絵本のタイトル、②画家・作家、③翻訳者、④シリーズ名、⑤出版年、⑥出版社。翻訳絵本であれば、⑦原著タイトル、⑧原著発行国、⑨原著出版社、⑩原著発行年が付加えられている。さらに、⑪文字あり・なし、⑫受賞歴の情報が入力されている。

主人公のプロフィールは、⑫性（男・女・中性〈事物等〉・男女〈複数の主人公〉）、⑬年齢層（A赤ちゃん、B幼児、C小学校低学年、D小学校高学年、E中・高校生、F成人、G老人、H生涯〈主人公の障がいを追う〉、その他）にわけられている。

大主題ならびに主題は、1「生活と自立」（355主題）、2「自我・自己形成」（696主題）、3「友達・遊び」（937主題）、4「性格」（434主題）、5「心」（612主題）、6「家族」（242主題）に分けられている。これらの主題は、5つまでの主題が自由にクロスできたり、主題×主人公の年齢、画家や作家×主題、出版年代×主題など、様々に検索できるシステムとなっている。約2,800冊の絵本の書誌情報が入力されている。

本稿でのテーマである親の離婚後の親子の人間関係を描いた絵本を抽出する。そのため、「離婚と子ども」をテーマにした絵本を抽出する。大主題「自我・自己形成」の中の主題「父母の離婚」で単独検索すると、12件あった。

② 離婚後の親子の人間関係を描いた絵本

データベース「子どもの心を理解するための絵本」¹⁾で検索された12冊の絵本のうち、海外から入っては来ているものの、まだ翻訳されていない絵本（イギリスからの絵本1冊とアメリカからの絵本4冊）は分析対象から省いた。即ち、イギリスの『Two of Everything』Babette Cole作 Babette Cole絵（1997）である。デミトリアスとポーラの両親は、とても仲が悪く、年々見かけも醜くなっている。二人は、両親を離婚させることを決行する。そして、二つの家を見て、両親を別居させ、家族は末永く幸せになるという前向きな絵本である。そして、アメリカから日本に入ってきた離婚にまつわる絵本は、ルーズベルト大統領の妻、エレナー・ルーズベルトの生い立ちを描いた『Eleanor』（Barbara Cooney作 Barbara Cooney絵 1996）、両親の離婚後、父と母の2つの家での生活することを通して、主人公プリシラは様々な形態の家族があることを理解してゆく『Priscilla Twice』（Judith Caseley作 Judith Caseley絵 1995）、父子家庭を描く『You Hold Me and I'll Hold You』Jo

Carson作 Annie Cannon絵 1992)、両親が離婚したため、父と母の2つの家で暮らすことになった女の子のお話『MY MOTHER'S HOUSE, MY FATHER'S HOUSE』(C.B. Christiansen作 Irene Trivas絵 1989)の4冊がある。

分析から省いた理由は、日本の幼稚園では、幼稚園教諭らが、読み聞かせに英語の絵本を選択する可能性は高くないと考えたためである。

さらに、データベース「子どもの心を理解するための絵本」の中の、『うでまクマ』と離婚する夫婦とその子どもたちを支援する現場の支援者らが勧める絵本の中の『会えないパパに聞きたいこと』は実際に面会交流をする場面がないので、離婚後の親子の人間関係を描いた絵本という基準には当てはまらないため分析対象から省いた。

③ 離婚家庭を支援する現場が勧める絵本

離婚する夫婦とその子どもたちを支援する現場の支援者らが勧める絵本として、「家族のためのADRセンター」²⁾のホームページとリアン夫婦相談室のホームページに挙げられていた絵本も分析対象に加える。「家族のためのADRセンター」³⁾のホームページにおいて、低年齢向けに「子どもに離婚を説明する本」として、『恐竜の離婚』、『いまは話したくないの』、『ココ、きみのせいじゃない』、『会えないパパに聞きたいこと』の4冊の絵本が挙げられていた。リアン夫婦相談室のホームページでは『パパはジョニーっていうんだ』、『ココ、きみのせいじゃない』、『パパどこにいるの?』の3冊が挙げられていた。この中で、『恐竜の離婚』(2006)は、小学校中・高学年の子ども向きなので、分析対象から省いた。

また、日本離婚・再婚家族と子ども研究学会から、シンガポール政府の社会・家族開発省 (the Ministry of Social and Family Development) が2017年に英語で制作・発行された絵本、*Dear Mom and Dad, Don't Make Me Feel Bad: A Child of Divorce Speaks Up* (リム・ヒュイミン作) を、日本語訳版制作した絵本『お父さんお母さんへ ぼくをいやな気持ちにさせない

でください 離婚した両親への手紙』(野沢慎司訳)が2019年に発行されている。話は「小学生の男の子が、離婚した両親の家を来し、双方から相手の悪口を聞かされたり、味方に引き込まれたりして『ぼくは、カウンセラーじゃないし、味方でもないし、賞品でもないです』『そういうのが必要ならぼくのような子どもじゃなく おとなの人にたのんでください。』から始まり、自分の気持ちをどんどん訴える。」という内容で、現代版離婚絵本とも言え、子どもたちには共感を呼ぶであろうが、WEB上での閲覧用PDFファイル版なので、今回は分析対象としなかった。

以上から、日本語に翻訳され日本で出版された、離婚後の親子の人間関係に係わる絵本は、9冊が確認された。アメリカで出版されたものが多かったことは言うまでもない。

その9冊とは、下記の表1のとおりである。

表 1

書名	テキスト	出版社	日本での 発行年 (原作国で の発行年)	原作国
1. 『パパとママがりこんしたとき』	モニカ・ギーダール作 M.アンダーソン絵 北沢杏子訳	アーニ出版	1983 (1973)	スウェーデン
2. 『パパとぼくはわかれている りこんでなんだろう』	アニュエス・ロザンスチエール作 アニュエス・ロザンスチエール絵 庄司洋子訳	草土文化	1984 (1979)	フランス
3. 『ココ、きみのせいじゃない』	ヴィッキー ランスキー著 ジェーン プリンズ絵 中川雅子訳	太郎次郎社エディタス	2004 (1998)	アメリカ
4. 『パパはジョニーっていうんだ』	ポー・R・ホルムベルイ作 エヴァ・エリクソン絵 ひしきあきら訳	BL出版	2004 (2002)	アメリカ
5. 『おうちがふたつ』	クレール マジュレル (著) カディ・マクドナルド デントン(絵) 日野知恵・日野健	明石書店	2006 (2001)	イギリス

6. 『パパどこにいるの?』	ゴフ、ベス作 パール、スーザン絵 日野知恵・日野健	明石書店	2006 (1969)	アメリカ
7. 『いまは話したくないのー親が離婚しようとするとき』	ジニー・フランツ・ランソン作 キャサリン・クンツ・フィニー 上田勢子訳	大月書店	2007 (2000)	アメリカ
8. 『ふたつのおうち』	マリアン・デ・スメット作 ネインケ・タルスマ絵 久保谷洋訳	朝日学生 新聞社	2011 (2010)	ベルギー ・ オランダ
9. 『ほくは船長』	クリスティーネ・メルツ作 バルバラ・ナシンベニ絵 みらいなな訳	童話屋	2012 (2011)	ドイツ

これらの絵本は、いずれも離婚後の親子の積極的な人間関係構築の為に、心血を注いで入念に仕上げられた作品である。特に『ココ、きみのせいじゃない』は、家庭裁判所の調停のための待合室にも置かれている人気の高い貴重な絵本である。それ故、離婚後の親子の人間関係の構築のために、絵本は重要な役割を果たしていると考えられる。

5. 考察

それでは、具体的にこの9冊の絵本について、本論文のテーマに沿った考察を進めてみよう。

(1) 『パパとママがりこんした時』(Sa var det nar petras foraldrar skildes)
主人公：女 主人公年齢層：幼児

『パパとママがりこんした時』は1983年にアーニ出版から出版された27×19cm、27ページの絵本である。話しは「あるばんペトラは、パパとママのおおきなこえで目をさます。トイレで聞き耳を立てているとパパがやってきてペトラをだいて、心配しなくてもいいことや、パパとママは別々に暮らそうと話し合っていることを説明する。あくる日、ペトラは仲良しのオラにバ



1. パパとママがりこんしたとき

みをパパの家で暮らしたり、ママの家で暮らしたりする。そして、秋からは、毎週土曜日になると、パパは二人が来るのをまっている。パパの家では、パパの新しい恋人とその娘と一緒にすごしたり2人の家に泊りにいったりして、関係ができていく。ママの家でも、ママの新しい恋人がよく遊びに来るようになり、ペトラとユーナスはママの恋人とも仲良くなっていく」という内容である。子どもの視線から両親の離婚、親子の関係、それぞれの親の新しい恋人との関係などを描いている。両親の離婚話を聞かされたとき、ペトラは泣いたり自分の気持ちを表現したりし、パパとママは、もう愛し合えなくなってしまったことという説明を怠らない。そして、実際に別々の家で暮らし始める両親の双方と関係を築いていくことができている上に、双方の新しいパートナーとも人間関係を育んでいく。

(2) 『パパとぼくはわかれている りこんてなんだろう』(LA SEPARATION)

主人公：男 主人公年齢層：低学年

『パパとぼくはわかれている りこんてなんだろう』は、1984年に草土文化から出版された27×23cm、47ページの絵本である。話しは「主人公の男の子の家にガールフレンドが遊びに来て、ママに会ったり、普通にパパの話をしたりする中で、男の子は『僕のパパとママはわかれているんだ。』と言い始めるがガールフレンドにはわからない。そこで、男の子が両親が離婚す

パとママが離婚することを話したり、夜、兄のユーナスに話したりするけれど、悲しいばかり。パパとママが、もうふたりが愛し合えなくなってしまったことや、これからのことを説明し、パパが引越すことになる。

ペトラとユーナスは、夏休

る時のことを回想しながらガールフレンドに説明する形で物語は進んでいく。両親が離婚を決めた時、『ママはパパとちがううちに子どもたちとすむ。でもパパのうちももちろんきみたちのうちだ。あなたたちはわたしたちの子ども、いつまでもそうなのよ!』とパパとママが話すのを回想する。『それじゃ僕は誰を愛したらいいの?』と問うと、『どちらかを選ばなくていいのよ。あなたたちにはいつもパパとママがついているんだから』とママは説明する。』という内容である。別々に暮らす両親の双方と一緒に暮らしているときと同様の親子関係を築いている現実を描写する絵本である。

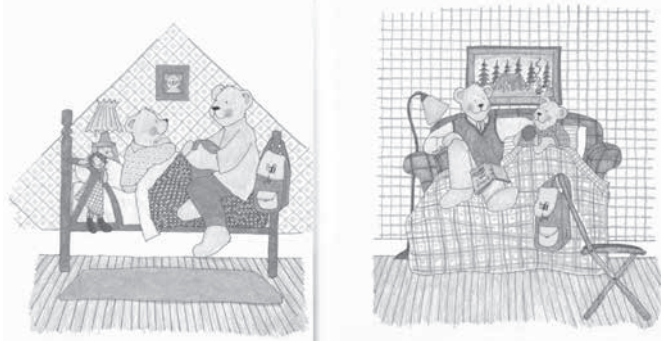


2. パパとぼくはわかれている

(3) 『ココ、きみのせいじゃない はなれてくらすことになるママとパパと 子どものための絵本』 (It's Not Your Fault, Koko Bear)

主人公：ユニセックス

『ココ、きみのせいじゃない』は、2004年に太郎次郎社エディタスから出版された21×22cm、34ページの絵本である。主人公のこぐまのココは、男の子でも女の子でもないユニセックスな存在である。ココをとおして、親の離婚に直面した子どもたちは、新しい生活と、そして自分の気持ちとうまくつきあう方法を見つけていくであろう。話しは「ある日、パパとママがココに離婚することと、ココにとってはふたつのおうちができる、という話しをする場面から始まる。そして、ココの気持ちは嬉しくないままに、パパだけのお引越しの日がくる。ココも、パパの新しいお家に行くが、『どうしてパパはここにすまなきゃならないの? ココが悪い子だから?』と尋ねる。パパは、離婚はココのせいじゃないこと、なかよしだったおとなでも、優しい気持ちになれなくなって一緒に暮らしていけなくなることもあることを説明す



3. ココ、きみのせいじゃない

る。幼稚園でのお絵かきの時間、仲良しのパーティーが笑顔の離婚している両親とそれぞれの家と笑顔の自分の絵を描く。ママとココは、きもちしらべの日をカレンダーにマークし、日を決めて心に聞いてみることにしたし、ママは、パズルをしながら、大人同士のピースが合わなくなっても、親子のピースはいつまでもぴったり合うことを話す。ママの家での寝る時間、ママは『ママもパパも、ココちゃんのことを だいだいだいだい だーいすき』と言い、パパの家での寝る時間『パパもママも、ココちゃんのことを だいだいだいだい だーいすき』と言う。そして、パパは、おじいちゃんとおばあちゃんやいとこが、ココと一緒に住んでなくても仲良しの家族じゃないかなと話すと、ココの気持ちは暖かくなっていく。」という内容である。

この絵本は、子どもと親がいっしょに離婚を乗り越えるのをサポートする本でもとも言われ、近年では、この絵本を待合室に置いている家庭裁判所もある。物語とともに、各ページに両親のための具体的なヒントとアドバイスが書かれている。

(4) 『パパはジョニーっていうんだ』(EN DAG MED JOHNNY)

『パパはジョニーっていうんだ』は2004年にBL出版から出版された25×20cm、25ページの絵本である。ティムという主人公の男の子とパパとの面会交流の一日を描いていた作品である。話しは「2人は、ホットドックをほ

とそれぞれのおうちで、親子ふたりで過ごすときに告げる。「パパはアレックスが好きなんだ」ではなく、「パパもママもアレックスが好きなんだ」と言い、「ママはアレックスが好きなのよ」ではなく、「パパもママもアレックスが好きなのよ」と言うところである。単におうちがふたつあるという物理的なことだけではなく、パパと子どもの時間とママと子どもの時間があり、別れていても、双方の親と人間関係が築けていっていることを絵や文で表現している。



「もママも アレックスが好きなんだ」と パパが



「パパとママはどこにいても アレックスが好きなのよ」と ママが

5. おうちがふたつ

(6) 『パパどこにいるの?』 『Where is Daddy?』

対象年齢：幼児

『パパどこにいるの?』は2006に明石書店より出版された23×25cm、27ページの絵本である。子どもの気持ちの変化を丁寧に描写した絵本である。話しは「主人公のジェイニーには、はじめは離婚の意味もわからず、パパが家を出て行ったのは自分が遊んでくれないからと怒ったからだと思ったり、パパとママの怒鳴り合いが始まると自分のせいだと思う。おばあちゃんがファニーを家に入れてくれないので泣いて訴えると、おばあちゃんは『悪い子ね』という。ジェイニーは、怒るとその後、悲しいことが起こるので、ほとんど口をきかなくなる。ジェイニーは、ファニーまでいなくなったと思い、いじめるところを、ママがみていて、ジェイニーが泣き止むまで抱きしめ、会社に連れて行って働いているところを見せる。おばあちゃんも、本を読んでくれ

たり、ずっと優しくなり、ときどきファニーを家の中に入れてくれるようになる。パパも会いに来て、動物園に連れて行ってくれ、一緒に笑って過ごし、ジェイニーの気持ちはすっきりする。」という内容である。離婚の意味



6. パパどこにいるの

がわからない幼児が、パパが急に一緒の家になくなる現実を受け止めていく過程で、気持ちが少しずつ変化していく様子を丁寧に展開している。親が喧嘩したり離婚したのは自分のせいだと思う子どもたちにとって、自分の心の整理をするための一助となるであろう。

(7) 『いまは話したくないの』 (I Don't Want To Talk About It)

『いまは話したくないの』は2007年に大槻書店から出版された26×19cm、28ページの絵本である。話しは「ある時、おとうさんとおかさんが、離婚することにしたことを話す。最初は、聞こえないように亀になりたい気持ち、ゾウになってけんかをとめて、いやあな言葉を粉々に踏みつぶしたい気持ち



7. いまは話したくないの

が描かれている。話す気持ちが悪くなるからと言われても、怒ってもいいんだよって言われても、悲しくなってもいいのよと言われても、こわいって感じてでもいいんだよって言われても、私の気持は『話したくない』。馬になって逃げだしたい気持ち、ハリ

ネズミになって誰にも傷つけられたくない気持ちになる。ワニになって、ゼーんぶ、がぶっがぶっと食べてしまいたい、水の中なら涙を流しても誰にも知られないから、魚になりたいと思う。そして、『話したくないってばー!』とライオンになりたい私。絵は、父母と動物で表現されている。徐々に、私は冷静になっていく。」という内容である。おとうさんと住んだり、おかあさんと住んだりすること、両方と会えること、今までと同じように、一緒にご飯をつくったり、ゲームをしたり、一緒にお花を植えたりできること、どちらの家でも愛があることを聞いて安心する。変わっていくこともあるけれど、変わらないこともあることを理解して安心していく子どもの気持ちの変化が理解できる絵本である。

(8) 『ふたつのおうち』(IK WOON IN TWEE HUIZEN)

主人公：女 主人公年齢層：小学校低学年

『ふたつのおうち』は2011に朝日学生新聞社から出版された26×22cm、25ページの絵本である。話しは「両親が離婚し、ニーナは二つのおうちを持つことになった。パパの家とママの家を行ったり来たりして暮らしている。ニーナは、昔の生活が懐かしくなることもあるし、ママもおばあちゃんと何時間も話し込んでいたり、パパは遊んでくれていても悲しそう。ニーナは、パパの家にいる時は、ママがいたらいいのと思うし、ママの家にいる時は、

パパがいたらいいのと思う。

そんな時は、いない方の親と電話で話す。パパとママは一緒にいても楽しくないみたいだけど、二人からそれぞれに愛されているので、やっぱり幸せ。」という内容である。注目したいのは、「はじめてのプールのレッスンには、パ



8. ふたつのおうち

パもママも、2人とも見学に来てくれた」という場面である。共同親権制度の先進国では、幼稚園や小学校の参観を双方の親が来て、挨拶したり自然に話したりするのが一般的であることを理解させる。

(9) 『ボクは船長』(WIR HABEN DICH IMMER LIEB)

主人公：男 主人公年齢層：幼児

『ボクは船長』は2012年に童話屋書店から出版された21×26cm、28ページの絵本である。話しは「ママとパパが離婚しては慣れて暮らすことになり、僕はパニックになって、パパとはあそべること、いつでも会えることを聞いても『そんなのなしだよ』とパパに言う。幼稚園にいくと、パパとママが離婚しているロビンが、パパが送ってくれた何枚もの絵ハガキを見せてくれる。僕はパパもママも大好きなのに、別れるなんて信じられなかったけれど、パパとママはこれから友達になることを聞いて安心する。『ほくもママとパパのともだちってこと?』と聞くと、ママは『そうよ、とびきりだいじなせかいでいちばんなかよしの しんゆうよ』とママは答える。ママも前より明るくなって、すべてが新しくなったみたい。僕も新しい航海に出ることにした。僕はほくの船の船長だ。」という内容である。この絵本では、パパとママとの喧嘩の場面は出てこない。

そして、パパとママ、それぞれが、それぞれの説明の仕方、離れて暮らすことになったことや、これからのことを子どもに話し、子どもの気持ちに寄り添おうとする場面がある。注目したいのは、子どもが自分の部屋にパパの写真を貼ろうとするときママは一緒に選んだりする同居親のママの姿である。



9. ボクは船長

6. まとめ

以上、離婚と親子の人間関係を描いた9冊の絵本についての作品ごとの考察を試みた結果、大きく5つの特徴が見出された。

第1に、子どもが自分のせいだと思う場合。離婚前から、子に話す場面から始まる絵本では、子どもは親が離婚するのは自分のせいだと思っている描写が出てくる。『ココ、きみのせいじゃない』では、ココは、はじめ「どうしてパパはここにすまなきゃならないの？ココが悪い子だから？」と尋ねる。『パパどこにいるの？』においても、離婚する前、パパが出て行ったことも、パパとママが喧嘩するのもジェイニーは自分のせいだと考える。

第2に、子どもの気持ちは変化する。『いまは話したくないの』と『パパどこにいるの？』は、ある日突然、子どもが親から離婚の話しを聞いた時の、どん底に突き落とされるような悲しい気分から、怒ったり泣きたくなくなったりする気持ちや、親の言葉を聞けるようになるまで子どもの気持ちは変化する。そして、親の言う二つのお家で暮らすことになることを受け入れることができ、双方の親の愛を感じるようになり、再び笑顔を取り戻すまで、子どもの気持ちは少しずつ変化していく。

第3に、『おうちがふたつ』と『ふたつのおうち』、『ボクは船長』では、離婚後の夫婦のあり方が反映されている。『おうちがふたつ』では、親子ふたりで過ごすときに愛を告げるが、「パパはアレックスが好きなんだ」ではなく、「パパもママもアレックスが好きなんだ」と言い、「ママはアレックスが好きなのよ」ではなく、「パパもママもアレックスが好きなのよ」と言うところである。『ふたつのおうち』では、「はじめてのプールのレッスンには、パパもママも、2人とも見学に来てくれた」という場面がある。『ボクは船長』では、パパとママはこれからは友だちになると聞いてボクは安心する。アメリカをはじめ共同親権制度の先進国では、離婚後の元夫婦が、挨拶もしないという関係でなく、喧嘩は終わりにする元夫婦も多いことは広く知られている。

第4に、面会交流の大切さを扱う。『ぼくのパパは、ジョニーっていうんだ』は、ダイレクトに面会交流の大切さを読み手に理解させる役割を果たしている。そして、全部の絵本において、面会交流により、子どもの心は安心へと変化することが描かれている。

第5に、子ども同士の友人の役割が大きい部分もある。特に、『ココ、きみのせいじゃない』と『ボクは船長』はいずれも、既に親が離婚している園の友人が、双方の親と関係を築き、笑顔でくらしていることを知り、自分の気持ちを整理していく。『パパとぼくはわかれている』は、逆に、離婚の意味がわからないガールフレンドに離婚しても親子の縁が切れるわけではないことを説明し理解させる。読者の子どもたちにも、臨場感を与え、離婚しても親子の縁が切れるわけではないことや親がそれぞれ家に住んでそれぞれの親と子どもは人間関係を構築することができることを伝えることを可能にしている。

以上をまとめると、離婚後の親子の人間関係構築に関連する絵本の持つメッセージは次の4点に要約できる。

- ① 子どもの気持ちの変化に焦点を絞り、子どもの心のケアを行っているもの。
- ② 二つの家があることを子どもに理解させるもの。離れていても親子であることを確認するもの。親子の縁は切れないことを認識させていく。そのためには、面会交流が親子の人間関係構築にはかかせないことを物語っている。
- ③ 親は、喧嘩はもう終わりにして、相手の悪口を言わないなど、別れていく夫婦へのアドバイスにもなっているもの。
- ④ クラスの友達を意識させるもの。

今回分析対象とした絵本はみな、親の離婚を経験する子どもに離れて暮らすようになって「絆」で結ばれていることを、しっかり伝えられるであろう。これら本のなかに、子どもたちはきっと親の離婚という経験をともに乗り越えてくれる友だちを見出し、主人公が、自分の気持ちをわかってくれ

ているということを感じるかもしれない。さらに、これらの本を読む両親家庭の子どもたちにも、それぞれの親の家で、子どもはそれぞれの親と人間関係を構築していくことが理解でき、単身家庭の子どもたちの気持も理解し得ると考えられる。

そして、今、離婚後の親子関係をもっと大切に、単身家庭の子どもたちにも両親家庭の子どもにも理解でき、明るく前向きに未来を担う子どもたちにどのように伝達するかが、離婚後の親子の人間関係構築に関連する絵本の大きな課題だと考える。

註)

1. データベース「子どもの心を理解するための絵本」

佐々木宏子監修により鳴門教育大学付属図書館児童図書室に貯蔵され、WEBで公開されている。また、CD-ROM（Windows 95, 98, 2000対応）が佐々木宏子 2000『絵本の心理学』新曜社に添付されている。このCD-ROM（Windows 95, 98, 2000対応）には、内外の絵本2,100冊（日本語・英語版のみ）が入力されている。

2. 家族のためのADRセンター <https://rikon-terrace.com>

3. リアン夫婦相談室 <https://office-lien.com/soudan>

引用文献

1. あべひろあき作 こうのふみよ絵 1997『うでまクマ』双葉社
2. 佐々木宏子 2001「絵本は父親をどのように描いているか—心理学的分析試論」絵本学会研究紀要：bulletin of Ehon-gakkai Associates（3） pp.31-40
3. 佐々木宏子 1993『新版 絵本と子どものこころ—豊富な個性を育てる—』JULA出版局 p.242
4. 菅井洋子、秋田喜代美、横山真貴子、森田洋子 2003「ブックスタート協力家庭の母子相互作用（4）—母と子をつなぐ媒介手段としての指さし—」日本発達心理学会第14回大会発表論文集 p.244
5. 菅井洋子 2004 絵本を媒介とした母子相互作用の発達の研究—理論的枠組みの検討—日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 第10号 日本女子大学 pp.21-28
6. 高橋敏之、木内菜保子 1999「自分と身近な公共の乗り物とのかかわりを主題にした絵本と小学校生活科学習との関連性—先行体験としての幼稚園教育における絵本環境—」乳幼児教育学研究 乳幼児教育学研究編集委員会編（8） pp.63-74

7. 野沢慎司訳 2019『お父さんお母さんへ ほくをいやな気持ちにさせないでください
離婚した両親への手紙』日本離婚・再婚家族と子ども研究学会（リム・ヒュイミン 2017
Dear Mom and Dad, Don't Make Me Feel Bad: A Child of Divorce Speaks Up the
Ministry of Social and Family Development)
8. 松井直 1978『絵本をみる眼』エディタースクール出版部
9. Babette Cole作 Babette Cole絵 1997『Two of Everything』JONATHAN CAPE
イギリス
10. Barbara Cooney作 Barbara Cooney絵 1996『Eleanor』Viking (Penguin USA) ア
メリカ ルーズベルト大統領の妻、エレナー・ルーズベルトの生い立ち。バーバラ・クーニー
作 1998 掛川恭子訳『おちびのネル ファースト・レディーになった女の子』ほるぷ出版
11. C.B. Christiansen作 Irene Trivas絵 1989『MY MOTHER'S HOUSE, MY FATHER'S
HOUSE』Atheneum (Macmillan) アメリカ
12. Jo Carson作 Annie Cannon絵 1992『You Hold Me and I'll Hold You』Orchard
Books アメリカ
13. Judith Caseley作 Judith Caseley絵 1995『Priscilla Twice』William Morrow & Co.,
Inc. アメリカ. L・H・スミス 1979 石井桃子訳『児童文学論』p.203 岩波書店
14. ローリーン・クラスニー・ブラウン作 マーク・ブラウン絵 日野 智恵 訳 日野
健 訳 2006『恐竜の離婚（絵本シリーズ「パパとママが別れたとき……」）』変わっていく
家族のために 小学校 中・高学年の子ども向き。

分析対象絵本

1. 『パパとママがりこんしたとき』モニカ・ギーダール作 M.アンダーソン絵 北沢杏子
訳 アーニ出版 1983
2. 『パパとぼくはわかれている りこんでなんだろう』アニュエス・ロザンスチエール作
アニュエス・ロザンスチエール絵 庄司洋子訳 草土文化 1984
3. 『ココ、きみのせいじゃない』ヴィッキー ランスキー著 ジューン プリンズ絵 中川雅
子訳 太郎次郎社エディタス 2004
4. 『パパはジョニーっていうんだ』2004 ボー・R・ホルムベルイ作 エヴァ・エリクソ
ン絵 ひしきあきら訳 BL出版
5. 『おうちがふたつ』クレール マジュレル（著）カディ・マクドナルド デントン（絵）
日野知恵・日野健 明石書店 2006
6. 『パパどこにいるの』ゴフ、ベス作 パール、スーザン絵 日野知恵・日野健 明石書
店 2006
7. 『いまは話したくないのー親が離婚しようとするとき』ジニー・フランツ・ランソン作 キャ
サリン・クンツ・フィニー 上田勢子訳 大月書店 2007
8. 『ふたつのおうち』マリアン・デ・スメット作 ネインケ・タルスマ絵 久保谷洋訳

朝日学生新聞社 2011

9. 『ボクは船長』 クリスティーネ・メルツ作 バルバラ・ナシンペニ絵 みらいなな訳
2012 童話屋